東京ジャーミイ金曜日のホタバ

２０１１年１０月28日

恥を知る気持ち

親愛なるムスリの様

　恥とは、道徳に反する出来事が生じた時に心が痛みを感じることを言います。これは恥じの意識を持っている人には即座に見受けられることです。なぜならこの醜い出来事のために恥という徳を備えた人の自我は影響を受けるからです。恥の意識は人に徳の道、肉体的かつ精神的に進歩する道を示します。徳や恥の意識によって悲しみを感じることのない人を礼儀や徳といった道に至らせることは困難です。社会の発展は恥の意識がしっかりと根付くことと密接な関係があります。

　イスラームの道徳学者は恥の意識を様々なカテゴリーに分類しています。このうちの一つがアッラーに対する恥の意識です。これはアッラーのご命令と禁止事項に従うことによって成就します。もう一つは人々に対する恥の意識です。人々を苦しめたり、人々のそばで醜い行為をとったり醜い言葉を吐いたりすることを避けることによって成就します。最後のものは、人の自分自身に対する恥の意識です。これはまず人が自分自身に、そして周囲の人に対し敬意を持ち、礼儀を尽くすことを意味します。人は理性や信条、恥の意識によって自我やシャイターンの悪影響と戦っているのです。アッラーへの信仰が強く、恥の意識を失っていない人は、善や美へと向かい、悪事や禁じられていることから遠ざかります。これに対し、アッラーへの信仰が弱く、恥の覆いが破られ、もしくはぼろぼろになってしまい、我欲やシャイターンに負けている人は悪事や禁じられている事柄を容易に実行することができます。この種の人々のうちの一部はアッラーも人間も気にせず、悪事や醜い行いを堂々と実行することができます。預言者ムハンマドは「恥の意識がないのであれば勝手にしなさい、という言葉は、人類が最初の預言者の時以来ずっと聞かされてきたものである」とおっしゃられました。これは恥の意識を失った人が悪事を容易に行なうことができることを示すと同時に、道徳や恥の意識が神による諸宗教に共通する教えであることを示しています。

　恥の意識は、人がその創造の際から持っているもの、すなわち天分のものです。基本的に、民族や文化の違いにより種類はあったとしても、恥の意識は人類に共通する価値感であるということができます。恥の意識と信仰のつながりを見て、恥の意識があらゆる宗教に共通する価値感であることを認識するべきです。宗教的な恥の意識は信仰によって獲得される一つの徳です。信者は崇高なるアッラーが人の全ての行為をよくご存知であることを忘れてはいけません。この意識の重要性が認識されればされるほど、これは社会の安定と平和にもよい影響を与えるものとなります。今日のフトバを、クルアーンの言葉で締めくくりたいと思います。「疑いもなく、預言者にはあなたがたへのよい見本がある。」